

■ 昨年の新年号では、ネットワーク委員会の皆さんに東日本大震災から 1000 日を経過した時点の振り返りとして、南三陸の復興に向けた懸命の取り組みをルポしていただきました。今回は、一昨年 10 月の記録的豪雨により大きな被害を受けた大島の復興状況について、再び現地に赴いてルポをお願いしました。

12月7日から8日にかけて、ネットワーク委員会の委員8名で伊豆大島を訪問しました。ご存知の通り、平成25年の台風26号の記録的な豪雨で甚大な被害を受けた大島町は、復興に懸命に取り組んでいます。東京都が昨年10月から始めた『伊豆大島・復興支援ツアー』制度の補助を利用して、伊豆大島を訪れました。



(三原山噴火口)

ジオパークの島

伊豆大島は日本ジオパークに認定されています。「日本ジオパークネットワーク」によるとジオパークとは、山や川や海、そして大地、その下にある岩石から宇宙まで、数十億年の過去から未来まで地球を丸ごと考えることができる場所のことだそうです。つまり地球の胎動を間近に感じることができる地域と言ってもいいでしょう。

島の中央に位置する三原山(標高758m)は富士火山帯に属する活火山で、35年に一度程度噴火を繰り返してきました。三原山からの火柱を島の人々は「御神火様」と崇めて、山とともに生きてきたそうです。しかし昭和61年11月の大規模噴火は溶岩を溢れさせ、町に押し寄せました。そして全島民1万人が島外へ脱出し、約1ヶ月の避難生活を余儀なくされたのは記憶に新しいところです。現在は三原山山頂の火口にも容易に近づくことができ、その雄大さを肌で感じる事が

できます。さらに島の西側には幾層にも重なり合った美しい地層断面を見ることもできます。また元は火口湖だったという波浮の港の美しい光景にも心を奪われます。

台風26号の惨禍

平和を取り戻した島に、平成25年10月16日に大きな災害が襲いかかりました。台風26号の接近による記録的な豪雨によって大規模な泥流が発生、逃げる暇もなく死者・行方不明者39名という大きな犠牲を出してしまいました。火山灰を主体とする表土が崩壊し、大量の泥流と流木が発生したのです。許可を得て被災場所に立つと、山肌は何ヶ所も大きく削り取られ、住宅があったと思われる場所は瓦礫こそ片づけられているものの、荒涼とした土地が広がっているだけでした。今でも35世帯82名の方が仮設住宅住まいを余儀なくされています。

私たちは大島町役場土砂災害復興推進室の高橋弘昌推進係長と、政策推進課災害対策復興係の三田一宏氏にお話を伺うことができました。大島町の復興計画はこの9月に策定され、平成26年度～平成35年度の10年にわたる、河川の改修等の地域基盤・インフラ復旧等の事業と、産業・観光振興等の事業とのハード・ソフト両面の計画となっています。



(被災現場)

特に島の経済にとっての大打撃は観光客の減少です。大島は観光で生きている島でもあり、少しでも多くの方が訪れることが町の経済を活性化し、復興の力となります。東京都は被災直後から復興支援に取り組んできましたが、さらに観光振興と地域経済の復興を支援するため、指定旅行者によるパックスツアーへの補助金や、個人に対しては宿泊費補助や航空運賃の割引等の支援を充実させています（なお、期間・支援額等の詳細については東京都のホームページ等で必ずご確認ください。）

<http://www.gotokyo.org/jp/izuoshima/>

復興の一助に

調布飛行場・羽田空港から飛行機で25～35分、竹芝桟橋から高速船で90分と近い常春の“海外”に出かけてみてはいかがでしょうか。われわれリタイア組は“力”は出せないかもしれませんが、宿泊をして美味しい郷土料理に舌鼓を打ったり、お土産を買ったりする“支援”はできます。特に1月下旬から～3月は『椿まつり』が開催され、全島が椿の花に埋め尽くされます。そんな中、島の人々の温かさに触れ、ジオパークの大地の躍動を身体で感じてみてはいかがでしょうか。



(岡田港)
